

＝隣人との付き合いが不得手な日本人＝

1 か月ほど前、定期的に行っている厚生労働省時代の同期との飲み会の中で、中国との関係が話題になりました。いずれも外国での勤務経験者。彼らとの話を通して、私たちの世代も、何と隣国のことを知らないものだな・・・と実感した次第です。

今回は、隣人との関係が極めて薄い自分自身の生活を振り返りつつ、一衣帯水と言われながらも、心理的には遠い存在である中国との関係について考えてみます。

<皆さんは、どれほど隣人のことを知っていますか？>

私は、東京での生活が 25 年を超えています。その間、今、家族が住むマンションに 20 年近く住んでいました。

隣のひとと会えば、挨拶はしますが、その家族構成、思想信条など 全く知りません。家族のほうが、「おばあさんの具合が悪い」などの情報を良く知っています。

家族は、PTA や地域活動の非営利活動に長らく活動基盤を持っていますので、私の経済社会での基盤と足して 2 で割ると丁度良いなどと、私は言っていますが、もし、私一人で、隣人と、何かトラブルを解決しなければならなくなったとき、何ができると考えると・・・その方法を思いつきません。相手の情報が、ほぼ、ないからです。

また、昨年から、住民票を置く、地元福井でも、18 歳までは住んでいましたが、その後は、たまに住民に会えば挨拶する程度で、今でも、地域の情報は、両親から得るのが常です。その両親は、最近では、隣地のお宅と、土地の境界で揉めているようで、食事のときにも話題になります。私は、「相続税や固定資産税も減るのだから、相手の言い分を聞いても良いのでは？」と笑って言いますが、両親は、昔の苦勞した時代のことを思い出しては、「あの家は昔から、私たちを見下していた。」と、たぶん相手が思ってもいないことで、エキサイトしている状態です。

いずれ、私も、地元の活動にも関わる必要があるとは思っていますが、こうした過去の人間関係を知らずに安易に入ると、收拾がつかないだろうな・・・というのは容易にわかります。しかし、これをどう把握するかは至難の業です。

私たちの世代は、プライバシーを守るという社会的な要請を強く受け、自分のことも知られたくないが、他人のことを知ろうとするのも失礼という観念が強くあるように感じますが、皆さんは、いかがでしょうか？

私とは違って、隣人のことは、概ね、何でも知っている。もし、トラブルがあっても、解決できる自信があるという人もいらっしゃるでしょうが、多くは、私と同じようなものではないかと、勝手に推測しています。なぜなら、もし、大多数の人が、隣人に嫌がられるくらいに関心を持つのであれば、「孤独死」などの問題が生じるはずがないからです。

他者と正面から向き合って話をするのが苦手＝トレーニングされていない日本人のままで良いのか・・・国内的には今後の地域医療・福祉の壁となりそうですが、外交的な面では決定的な弱点に、なりかねません。

<外国に住んでわかったこと 他人とは話さないとわからない>

1995 年から 3 年間、中国の北京に住んでいました。大使館勤務の一等書記官としてです。この頃の四方山話は、いずれコラムで書くつもりですが、その時に、いくつか体で理解したことがあります。

1 生き抜くためには、相手に主張しないとけない。

最初の頃は、言葉も全く不十分でしたが、日本流に、「あれはありますか？」などと聞くものですから、「ない」と単純な回答があれば、まだしも、山のように、理解できない言葉が返ってきました。これは、ダメと思い、「あれを欲しい。」と、明確な要求をした上で、価格の交渉に入ることに切り替えました。

そうすると、自分の必要とすることは、確実に実現していくようになりました。日本にいるとき、なぜ、外国の人は、要求が強いのかと思いましたが、そうしないと現地では、生きるのが難しいからと思ひ当りました

2 明確に Yes No を言わないと、交渉者に信頼されず 相手にもされない。

生き抜く段階を過ぎると、相手から、どういう人間かと瀬踏みされる段階になります。

日本では、暗黙の了解といった、実際には存在しない「空気感」を前提に、会話が成立します。本質的な点と思われることには、あえて触れずに、何となく会議も進み終わります。角を突き合わすという雰囲気避けるためです。

これは、全く、中国では通用しませんでした。こうした当方が考えるような「空気感」はなく、相手から見れば、何を言っているのか、何を伝えたいのか、さっぱりわからなかったようです。

そこで、信頼できる現地スタッフ(中国人)に相談したところ、「結局は、相手との交渉なので、何ができて、何ができないかを明確に伝えないと、相手にされませんよ。」と、当たり前のことを教えてもらうことに。

その後は、担当する分野で、私が相手に Yes と言えば、最終的にも Yes。 No と言えば、No となるように国内側の調整を進めることとした結果、中国関係者からの信頼を得ることができ、相手からも本音の話をたくさん聞くことが可能となりました。

3 Yes No と結論が区分される背景を相手に理解してもらおう その後は相手が考えてくれる。

最終的には、なぜ、ある問題は Yes で 別の問題は No と 日本側が考えるかを、相手に理解してもらうことに精力を費やしました。相手から質問が多くあったのも事実ですが、私も、そうしたほうが、後々に良いと考えたからです。

前回紹介した「日本をこれから担う政治家は誰ですか？これがはっきりしないと誰も日本とは付き合わなくなります。政治や外交はシステムが行うのではなく、最後は個人が行うものです。個人の顔が見えない日本は付き合いにくいです。」との中国関係者の言葉は、こうしたやりとりをしているときに教えてもらったものです。

ちなみに、その時の答えは、「私以上に、日本をよく見ているあなたがわからないのだから、日本人の誰もわかりません。」というものでした。事実、その頃から、自民党政権も、以前よりは短命化をはじめ、中国首脳とのパイプも細っていったと感じます。

こうした相手との関係を意図的に築く過程は、中国内では、現地スタッフの話によれば、中国人同士であっても普通とのこと。例えば、北京でも出身地が違うものが多数おり、文化的な背景が大きく違うため、こうした軋轢を経ることは当たり前で、意思疎通を深めるために、少なくとも知識階級は、こうしたことをしているとのこと。これと比較するだけで、いかに日本人が、自分の意思主張を相手に伝える＝交渉するトレーニングが、されていないかがわかったものです。

TVで中国外交部の報道官(写真)が、厳しい顔つき、口調で会見をしている姿を見て、「鍛えられているな・・・」と思う度に、いつも、この会話を思い出します。



<私の知る 中国人の日本人観と 日本人の中国観>

当時、私を知る中国人は、必ず、私のことを「日本人らしくない」と言っていました。

理由は、Yes No がはっきりしており、決断が速いからだというものでした。実際には、事前に入念な準備をしていたからですが、表面的には、彼らにそう見えたのでしょう。

大概の日本人は、「今は即答できないので持ち帰って検討」とか、「上司と相談して結論を出す」と直ぐに先送りする。そう言うのであれば、その人とは会う必要がない(時間の無駄)。少なくとも、どういう方向になる、どういう判断基準などのメッセージもないのは、困ったものだ・・・というのが彼らの発想でした。

皆さん、どう感じるでしょうか。

彼らが、理解できないとした、日本人特有の回答は、日本では、今でも普通に聞くことができます。こうした、会議・意見交換に関する姿勢の違いが、日本人を理解してもらうことを阻害しているのだと思います。

しかし、一方では、中国人は、日本人を比較的、冷静に見ている人が多いと思います。

反日の暴動があった直後に、中国東北部に日本語教師として行った人(高校の同窓生の娘)の情報を聞くと、「多くの中国人は、ああした行動を悪いと思っている。あれは、一部の跳ね返りである。」と、冷静に、中国滞在を受け入れてもらい、極力、問題が生じないように行動をサポートしてもらったようです。ただし、やはり、日本人と自ら名乗るのは、避けて欲しいと言われたようですが・・・

東北地区は、中国の中でも、満州国の際に土地を奪われたりした歴史的な沿革もあり、反日の感情が強く残る地域ですが、一方では、日本人孤児を育てた人も多く、その帰国には、中央政府だけでなく、地方政府も好意的(私が、前回記した、東北地区の外事弁公室とのつながりは、これです)でした。

今回の暴動を見たある人からの受け売りですが、「燃やしていた日の丸は どこから入手するのだろうか？」との疑問が象徴的です。日の丸を買い与えて、燃やすパフォーマンスをしろと、使喚した人が、どこかにいるということです。誰かは、わかりませんが、そうしたことをする人は、必ず、政府中枢につながりを持ち、どちらかと言えば、反主流に属するのが中国です。大躍進運動・文化大革命など、人民を利用した政治抗争が伝統的手法の国なのです。

一方、日本側は、中国人を、どのように見ているのでしょうか。

中国勤務経験のある人は、「中国人は、あれこれうるさく交渉しづらい」とか、「彼らは本音を見せない」と言う人が多いようですし、経験のない人は、中国人との接点もなく、現代の中国人のイメージはないのではないのでしょうか。

あるとすれば、「犯罪集団として怖い人がいる」「夜の街でお金にうるさい女性」など、偏ったものが多いと思います。今回の反日の暴動で、さらに、こうした印象が広がるのは確実ですが、個人的には残念です。

反日の暴動があったのち、日本で勉強する中国女性のコメントが、これを裏付け印象的でした。

「日本人は、中国の経済とか歴史には関心があるが、実際に現代に生きる中国人には関心がないのではないか。お互いに関心がないから、こうした不幸なことが起きる」と・・・

また、一定の年齢層以上の人は、明らかに、中国人を蔑視している＝下に見ているように感じます。昔のイメージが抜けきらず、その感覚が、かえって中国の成長を、実像以上に脅威に感じているように思えます。

皆さんの中国人に対する見方は、どのようなものでしょうか？ それは、どのような経験に基づくものでしょうか？ ぜひ、再確認してもらえると よいと思います。

<私の見る中国人の特徴と中国の抱えるリスク>

私が数年の経験で得た、中国人の特徴は、下記のとおりです。

私が付き合った層が、中国の中でも知識階層に属しているせいもありますが、中国のトップクラスは、たぶん日本のトップとは比較にならないくらい優秀です。日本の 10 倍以上の人口の中で、選抜されてくるのですから、当然でしょう。

彼らは、個人主義で、合理的に物事を考えます。一見すると、家族主義に見えますが、彼らが家族・一族を大事にするのは、自分を裏切らない者として意識しており、個人主義の裏返しです。この個人主義は、基本的には、国を信用せず、依存しないことにつながり、「国家有政策、人民有対策」といった言葉遊びもあるくらいです。

また、交渉ごとは、表面での交渉と水面下での交渉を使い分けますし、最後まで、粘り強くあきらめません。表面的には、突っ張った声明を出しながらも、別にメッセージを出し、水面下の交渉を遮断するようなことは通常しません。

ただし、面子は非常に大事にしており、一旦、面子を傷つけられたと感じたら、徹底的に対応します。他者より、面子をつぶされても何とも思わない軽い奴と思われたくないとの意識が強いのではないかと思います。このため、問題が起きると、しばらくは、何を言ってもダメです。仮に、面子を潰された本人がもういいかと思っていたとしても・・・です。

彼らの弱点をあえて言えば、当時は、1 対 1 では中国人は勝つが、3 対 3 なら中国人は負けると、中国の知人と笑い合っていました。中国人は、主張が強いため、複数の場合、意見が簡単にまとまりません。これが、日本では見えない、中国政府中枢での激烈な権力闘争の根源です。逆に言えば、地方政府での経済改革の実績があり、かつ権力闘争を勝ち抜いてきた中国首脳が、いかに知力・気力・胆力に優れているかはわかるでしょう。

しかし、この笑い話も、今は通用しないような気がします。日本は、3 対 3 でも負けそうです。日本も同じく意見がまとまらなくなっているからです。まとまらない者同士であれば、個人の力量差で勝負が決まる＝日本の負けです。こうした、中国人といかに対等に渡り合うか、やはり、日本人は、国を出て、もっと他流試合をして、個人を磨かないとダメでしょう。しかし、留学を嫌がる、他県への進学が減るなど、今の学生の状況は、これに逆行しているのが残念です。

さて、今や経済力世界第 2 位の中国の抱えるリスクは何でしょうか。

これは、中国勤務時代も現在も変わっていないように見えます。食糧・エネルギー・国内格差の三つですが、彼らは、中長期的な視点で、かつ着実に、この問題にアプローチしているように見えます。

尖閣諸島の問題は、日本側では、今のところ国の威信といった面だけしか見えません(実際の水産・エネルギー資源確保の動きは弱い)が、中国側は、食糧・エネルギーの両面で大事な海域であり、現に、その確保の活動をしているということです。

15 年前、中国は、陸軍を主力として、海軍力は極めて弱体でした。しかし、食糧・エネルギー確保の観点から言えば、海洋に出ていくしかなく、それを念頭に、海軍力の強化などを計画的に進めてきました。一方、こうした中国側の動きは、在中国の日本大使館を通じて、15 年前から、政府に送られてきたはずで、それに対して、日本は、どのような行動をとってきたか・・・問われるべきは、その点からでしょうか。

また、国内の格差問題は、15年前より拡大したようです。以前は、沿海部と内陸部と単純な構造でしたが、今では、沿海部での上層・下層の拡大など、多元的な構造になり、解決は厳しくなっているように見えます。今は、経済成長が高いので、これをある程度、隠していますが、もし、成長が止まったら、一気に顕在化することは間違いありません。

こうしたリスクは、中国政府も昔から認めており、中国がアジアで危険な存在にならない理由にしています。中国における格差は、日本の格差と比べて、何倍、何十倍のレベルでの格差ですので、これは、本音なのだろうと思います。

さらに、中国は、共産主義からイメージする中央集権とは大きく異なり、分権的な連邦国家であることが、こうした格差問題を複雑にします。連邦国家を統治するために「共産党」というシステムが存在していますが、彼らが中央中枢に上っていくには、地方での、省経営の成功が条件になります。このため、省政治は、多元的になりがちです。

先日、中国内で逮捕訴追された共産党幹部も、こうしたプロセスにある者であり、省の格差問題を利用し支持を拡大したようですが、結果的には、権力闘争に負けました。しかし、彼らの支持者は、毛沢東の写真を掲げ、反日暴動に参加している…こうした構造は、日本人には理解できないでしょうが、今の中国中枢が最も恐れるポイントであることは間違いありません。このリスクは、どう考えても、規模の大きさから、今世紀中に解決することはないでしょう。

<今後の隣人との関係は？>

さて、今回、日本側は、尖閣の国有化という新たな一步を踏み出しましたが、以上のような特徴とリスクを抱える隣人と、どのように紛争を解決していくべきでしょうか。

今は、領土問題がクローズアップされ、それによる交流の冷え込みで経済停滞という点が強調されています。

いろいろな意見はあるでしょうが、個人的には、未来永劫、中国は隣人であることは変わらないのですから、あまり急がず、日中の今後の関係をどうしていくかを、再度、政府(与野党含め)として、考え固めることが必要と思います。

小泉総理時代は、内容がよくわかる「政冷経熱」といった言葉もありましたが、最近、政府が良く使う「戦略的互惠関係」は、中身がよくわかりません。その内容を明確にする作業をするに、良いタイミングと個人的には思います。

珍しくも、日本側から、従来の外交関係を乱す球を投げたのですから、それを機会に、本腰を入れて、今後の日中関係を真面目に固めて欲しいのです。これで小手先の解決をするようでは、何のための国有化かわかりません。

これは、裏返して言えば、政権が変わっても、変わらない方針を決めて欲しいということです(これは、日韓・日朝も同じです)。政権が変わる度に、外交方針が変わるのは、国内的にも国外的にも迷惑なことです。

政権が変わって、方針を大きく変えても良いのは、国内問題に限るべきなのでしょう。これは、外国で、日本の一部を代表して働いた者としての実感です。あまり、技術的な手法にとらわれず、協調するのは〇〇、争うものは〇〇、と相手と合意できれば、これほど安定した関係はありません。争うことで、他に影響を与えないからです。

暴動等で被害を受けた企業は大変とは思いますが、普段の利用者から、再開を急いでほしいという声を得たことを背景に、再生を急いでいるものもある一方で、製造拠点を、リスクの高い、中国から、東南アジアへの移動を考える企業も増えているとのことです。

種々の動きはあるでしょうが、日本の将来の安定は、経済的にも、安全保障的にも、中国との関係が重要な要素であることは間違いありません。これは、未来永劫です。

今回の問題を通じ、見方によっては、やっと、パンダに象徴される「日中友好」を謳うだけの表面的な関係から、本来的な中国外交が始まったと言えます。この新たな隣人との外交は、政府だけのものではなく、私たちも、中国人を良く知る努力をすることを通じて、お互いに切磋琢磨し、また協調連携する関係にならなければならないでしょう。

歴史的に、2国間の争いは国民の不信感に始まっています。紛争を政府の責任だけにする訳には、いきません。

さて、私も、改めて、今の中国について、知りたいと思っているところです。

加えて、福井や東京の隣人についても情報収集を始めます。

隣人との付き合いは、全て、外交と同じでしょうから…少しは、付き合い上手になる努力が必要でしょう。